佐賀県文化財調査報告書第34集

寺浦廃寺跡

（付 県下の新考古資料）

昭和51年3月

佐賀県教育委員会

寺浦廃寺跡

（付　県下の新考古資料）

昭和51年3月

佐賀県教育委員会

はじめに

寺浦廃寺跡は県下に存在する数少ない古代寺院跡でありますが，早くから知られて，諸学により研究が進められています。

今回の調査は，果樹試験場研修棟建設に伴う小規模な発掘でありましたが，後に記すような，いくつかの成果があがっており，小冊子ではありますがここに報告書を作成し皆様方の研究に供したいと思います。

なお発掘調査にあたっては，小城町教育委員会・果樹試験場をはじめ関係者の方方にひとかたならぬ御協力をいただき感謝しております。

昭和51年3月

佐賀県教育委員会

瀬戸口　芳夫

目　　次

はじめに

Ⅰ　調査の経過 …… 1

　1．概　　要 …… 1

　2．発掘調査日誌 …… 1

Ⅱ　遺　　跡 …… 4

　1．遺跡の環境 …… 4

　2．遺　　構 …… 4

Ⅲ　遺　　物 …… 6

　1．土　　器 …… 6

　2．　　瓦 …… 8

Ⅳ　ま　と　め …… 12

Ⅴ　県下の考古資料 …… 13

　1．銅　　鏡 …… 13

　2．青銅器・鉄器 …… 14

　3．石製品・土器 …… 17

図　　版 …… 19

例　　言

挿　図　目　次

第 1 図　寺浦廃寺跡位置図…… 3
第 2 図　寺浦廃寺跡付近地形図（地割図）…… 4
第 3 図　遺構配置図…… 5
第 4 図　寺浦廃寺跡出土土器・石器…… 7
第 5 図　寺浦廃寺出土軒丸瓦…… 9
第 6 図　寺浦廃寺出土軒平瓦……11
第 7 図　「大」陰刻平瓦片……12
第 8 図　出土鏡実測図……13
第 9 図　把頭飾実測図……15
第10図　吉野ケ里出土細型銅剣及び志波屋出土鉈……16
第11図　二本黒木・荒竪目出土器・石器……17

Ⅰ　調査の経過

1．概　　要

寺浦（晴気）廃寺跡は，佐賀県小城郡小城町大字畑田字寺浦にあって，塔心礎が残る塔跡の土壇は昭和46年6月23日付けで佐賀県史跡に指定されている。

塔跡東側約15ｍには金堂跡と推定されている12個の規則正しく並んだ礎石のある土壇が，大正の初年まで遺存していたが青年会場建設にともない，削平されてしまい現存しない。

寺浦廃寺は早くから注目され松尾禎作[1]や七田忠志[2]等により報告がなされ，七田は塔跡，金堂跡，講堂跡，南大門跡の位置を推定して寺域の復原をはかり法隆寺式の伽藍を考察しているが，正確な規模・構造等は不明であった。

一帯は南にのびるゆるやかな傾斜をもつ扇状地の扇頂部にあたり，水田や畑地として開墾されているがしだいに民家が立ち並び，地形等も変化している。佐賀県では昭和49年度事業として塔心礎が残る土壇南側の水田を買収し，県立果樹試験場の付属機関として果樹研修センター建設を計画し，５月から工事に着手していた。県教育委員会への事前の連絡もないうちに，252番地・253番地の水田が埋めたてられ，基礎工事も完了していたが，昭和49年６月末頃に，一高校生の通報によりおびただしい遺瓦の出土が判明した。早速，県農林部園芸課ならびに県立果樹試験場と協議し，センター北側に予定されている浄化漕・受水漕・調理員宿舎等付属施設についての工事中止を了解してもらうとともに，県建築課の協力もえて設計変更の協議を繰り返した。

すでに研修棟本体の基礎工事が完了していたこともあって，研修棟の北端の線から以南に前記の付属施設を建設することとし，浄化・受水漕を研修棟西北隅にやむなくつくることになり，その部分の事前の発掘調査を実施することとした。

こうして，昭和49年７月８日～７月25日の間発掘調査を実施した。

調査員には県教育庁文化課文化財調査係の，高島忠平・佛坂勝男・天本洋一及び県立博物館志佐輝彦があたり，別府大学々生盛峰男・国学院大学々生七田忠昭・県立果樹試験場・寺浦区の協力をえた。

なお，その他の発掘調査協力者は次の方々である。

吉原荒吉（寺浦区長）・於保ヨシ子・中村チヨ・永渕宮子・鮎川テル子・早田松乃・林マサエ・於保義彦（いずれも寺浦区）

2．発掘調査日誌

○７月８日（月）　晴

午前８時30分作業開始。表土層の排土にかかる。表土層下には砂層があり平常の水田耕作には本砂層まで耕作するという。一部黒色土がみられるが，深く掘りこんだところ遺構とは関係ないことが判明した。水田の床土に移入された黄褐色粘土層を目途し排土続行。

〔来訪者〕

果樹試験場長・小城町教育長・公民館長・県建築課・小城町公民館職員

○７月９日（火）　晴

地下水が高く湧水が多い。トレンチ南壁に沿って，東西に幅20㎝の排水溝を設定し，貯水用の溝を掘る。黄褐色粘土層はトレンチ西側で厚さ約５㎝，東側では約20㎝ほどある。本層を排土し，黒色土上層までを掘りあげる。

〔来訪者〕

小城町企画係長・試験場長・小城高校生２名

○７月10日（水）　曇り時々雨

トレンチ南側で湧水がひどい。黒色土層はトレンチ西側で比較的浅く，東方に進むにつれて深い。黒色土層は遺物包含層であるが，それほど大量の遺物（遺瓦・黒色土器片等）はない。灰褐色砂質土の上まで排土しようとするが，降り出した雨と下からの湧水のために作業を中断する。

〔来訪者〕

試験場職員３名。

○７月11日（木）　曇

試験場より排水ポンプを借用し，作業開始前に排水する。

トレンチの中央より西側では黒色土層がうすいため，砂質土には容易に達した。なお，この地山高まり付近の黒色土から滑石製石製品（石鍋片と考えられる）・平瓦片（布目瓦）等が出土する。木下之治県文化財調査監の指導を受ける。トレンチ東側の黒色土排土には，泥土状のため困難する。

○７月12日（木）　曇

前日に引続き，トレンチ東側の排土を継続。東壁に沿って排水溝を設定。黒色土排土中，中央部付近に不明の敷石を発見する。この石組を残し，北側と南側を深く掘り下げ，その性格をは握しようとしたところ，東北壁隅と南壁隅において軒丸瓦の瓦当が確認された。

東北隅は複弁の軒丸瓦で瓦当がほぼ水平にして検出し，現地表面から99㎝の深さである。南壁隅は単弁の軒瓦で，現地表面からの深さは 110㎝である。

石組はその性格が不明であるが，大きさもほぼ同じである。しかし，遺瓦がこの石組の下方からも出土した。

〔来訪者〕

県博物館森氏・果樹試験場３名。

○７月13日（金）　雨

排水ポンプを二台作動したが，降雨のため中断。出土品の水洗作業。

○７月15日（月）　小雨

作業中止。

○７月16日（火）　雨

作業中止。出土品整理。

○７月17日（水）　曇のち雨

午前中排水ポンプ三台作動。午後より瓦溜り周辺の排土。降雨のため再び中断し，出土品の水洗作業。

○７月18日（木）　雨時々小雨

排水作業。小雨の合い間に排土続行。

○７月19日（金）　曇

写真撮影。県文化課木下巧の応援を乞う。排水作業と平行して撮影。

○７月20日（土）　晴

実測作業開始。

〔来訪者〕

九歴鏡山猛館長・九芸工大沢村仁先生・奈文研黒崎氏・神埼高校七田忠志先生。

○７月22日（月）　晴

実測作業。

○７月23日（火）　晴

実測作業終了。

○７月24日（水）　晴

トレンチ中央より西側の回廊部分の地形確認のため深く掘り下げ，地層を確認して，調査終了。

○７月25日（木）　晴

器材撤収。

（佛坂勝男）

第１図　寺浦廃寺跡位置図

Ⅱ 遺　　跡

1．遺跡の環境

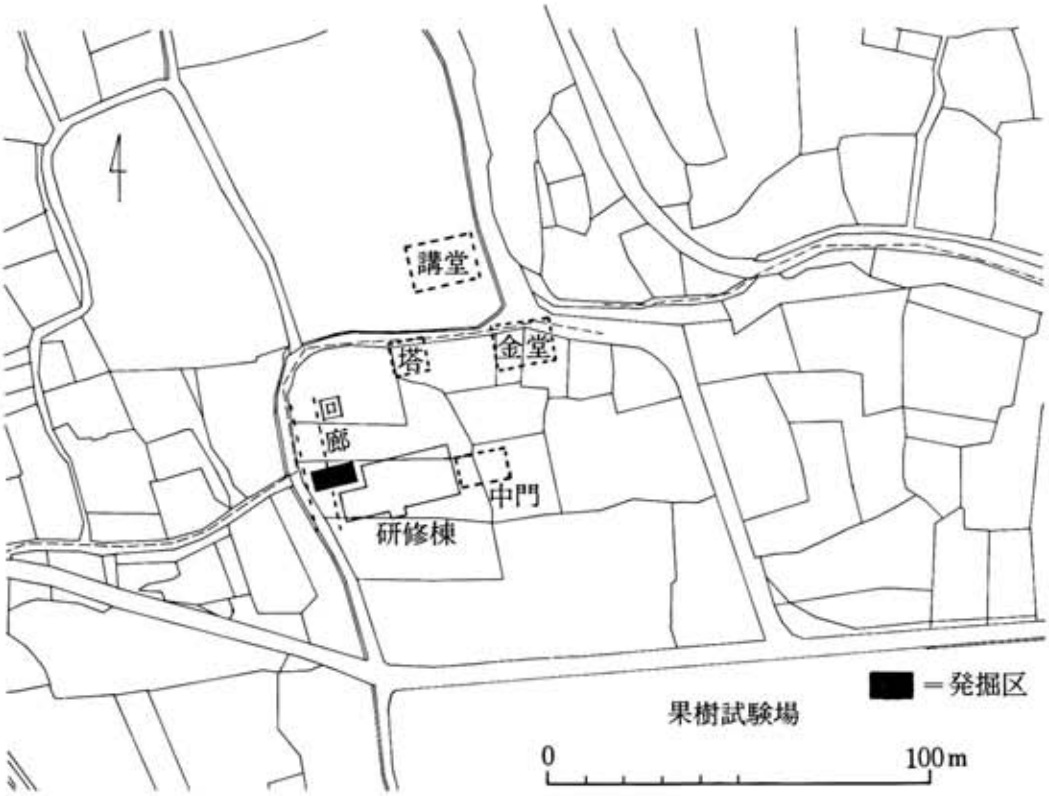
寺浦廃寺跡は佐賀平野の西北部にあたる小城郡小城町寺浦に所在し，晴気廃寺跡とも呼称される。

北方には脊振山脈中の第二の高峰である天山（標高 1,046 m）がそびえ，寺浦付近からはゆるやかな傾斜をもつ扇状地が南方に向けて発達している。本廃寺跡は扇頂部付近に位置し，この扇状地には山麓部の古墳群をはじめ，同郡三日月町土生[注3]・石木[注4]にかけた相当広範囲な地域に，弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群が密集していることが知られている。このことは県立果樹試験場建設工事中（昭和45年）にも，輝緑凝灰岩製の石包丁（第10図２・）などが採集されていることなどからも実証される。

南方の佐賀平野西部の水田には，その主方向をやや東南に偏した条里が展開している。

2．遺　　構

発掘調査は塔心礎南側に隣接する水田に建設されている研修棟西北隅の東西11 m，南北５ mの地域に限って実施した。この地域の土層は灰褐色砂礫土が地山で，その上に灰



第２図　寺浦廃寺跡付近地形図（地割図）

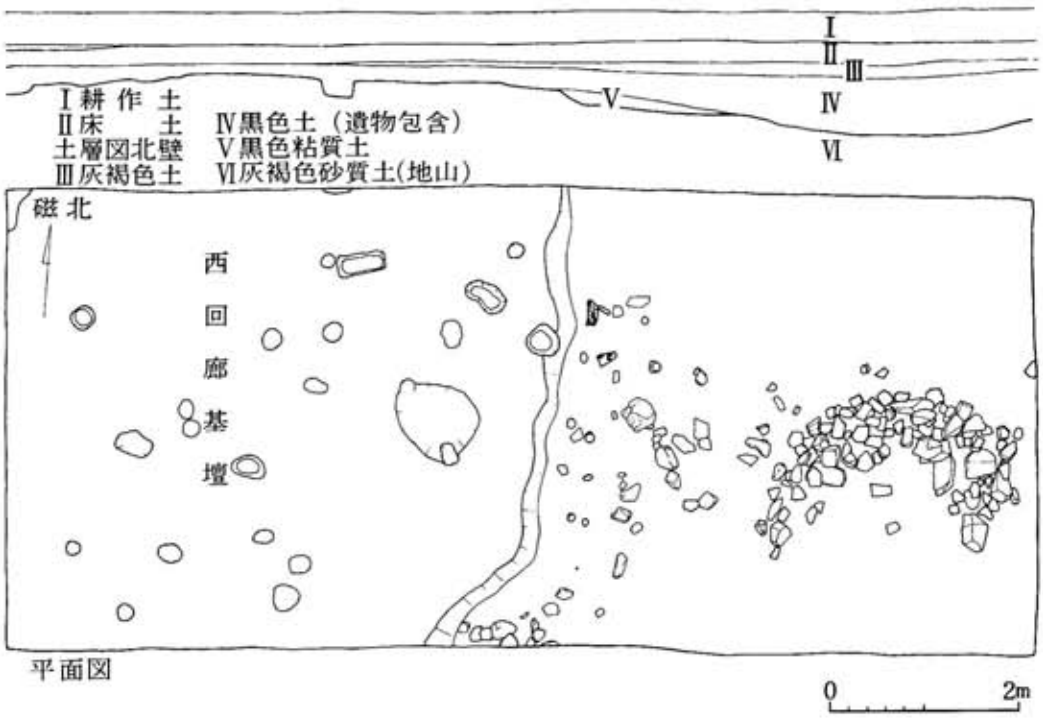
褐色砂質土・黒色土・灰褐色土・表土の順で堆積している。

検出した遺構は回廊の基礎と推測される灰褐色砂礫土層の地山の高まりと瓦溜りである。

トレンチの西隅から東側に向けて，南北方向にのびるとみられる高まりが約 4.5mあって，それから東は段をなして落ち込みとなっている。段のすぐ下側は土器の堆積が多く，この部分は土層図をみると高まりの東にそった南北溝とみられて回廊の東雨落溝と考えられる。この回廊とみられる高まりについてはトレンチの西側に里道があるため正確な幅員は不明であるが，遺構の西端から塔心礎の南北軸線までの距離が，およそ30m（ 100尺）であって，位置関係からみても塔と金堂を囲む回廊の一部であろうと考えられる。基礎工事の際，研修棟本体の東南隅付近において版築らしい小礫層みがみられていたことなどから，ここに中門の存在位置が推定される。なおこの位置は塔跡と金堂跡を結んだ線の中央部付近から，南側に約30m（約 100尺）の所にあたる。

回廊の地業とみられる高まりの東側で東雨落溝から以東は砂質の地山層がしだいに低くなっており，本砂層直上には瓦・礫・土師器・黒色土器・青磁がみられ遺物溜りの様を呈している。

（佛坂勝男）



第3図 遺 構 配 置 図

Ⅲ 遺　　物

出土遺物の主なものは，瓦・土師器・須恵器・磁器である。遺物は黒褐色土層に達する以前の排土中には細片化した遺物がかく乱した状況で散見されたが，黒褐色土層中つまり砂質地上直上からは比較的遺存の良い状況で出土した。遺物は回廊東側雨落部分とそれに連続する溜りのなかに礫と混在して検出土れている。土器類の多くは回廊雨落ち溝と思われる部分から検出された。

1．土　　器

土師器・須恵器・黒色土器及び輸入青磁器であって土師器が多い。

土師器

杯A（第4図1・図版6－1）　平たい底部に外傾する口縁部のつく形態で，口縁端部がやや外反する。一貫してロクロによって整作され，口縁部に水びきの痕跡が著しい。底部はヘラ切り離しのままで，その後に板目の圧痕がある。赤褐色を呈し，砂粒を含む。

ロクロは右廻りのものがほとんどである。杯Bに比べて出土個体数5分の1ほどで，約10個体分ある。

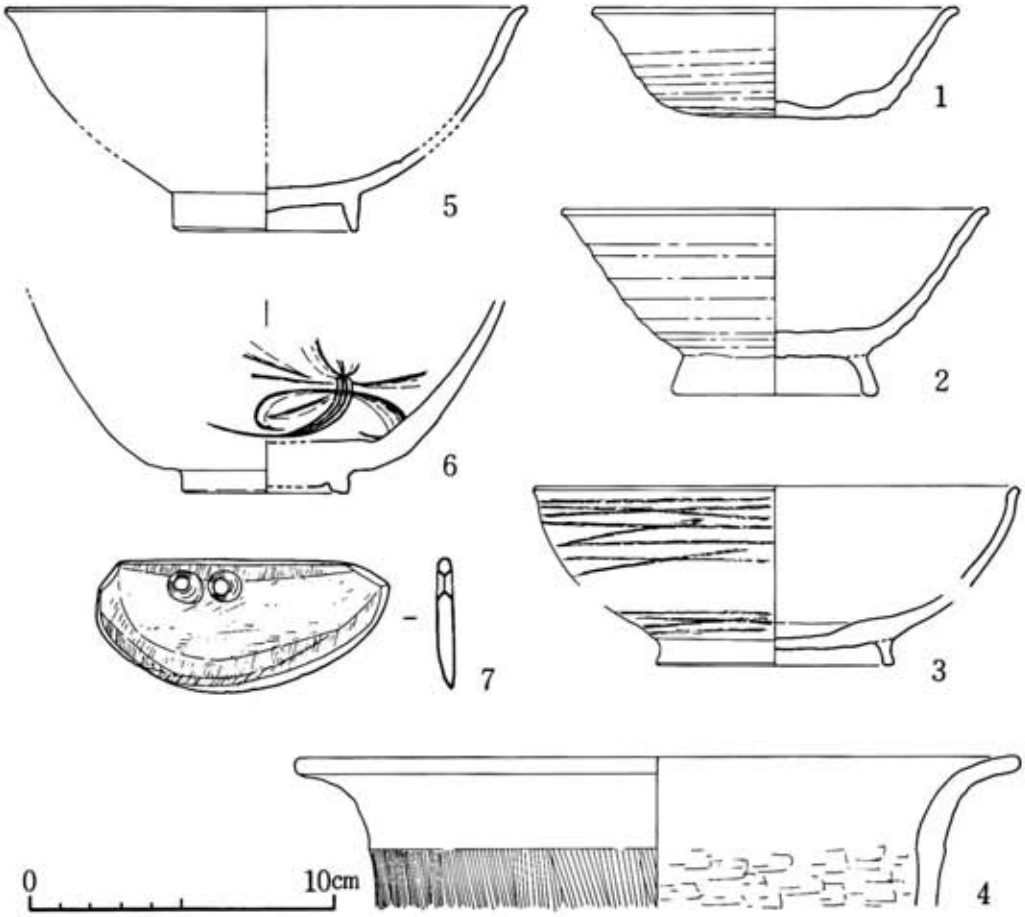
杯B（第4図2・図版6－2）　外にひらく輪状の高台のある底部にやや内弯気味にひらく口縁部のつく形態で，口縁端部がわずかに外反する。杯A同様，一貫してロクロで成形され，口縁部にロクロ水びきの痕跡が著しい。底部は，ヘラ切り離しのあと，調整せずに輪状の高台をとりつけている。ロクロはほとんどが右廻りである。出土個体数は一番多く約50個体分ある。

甕（第4図4・）　体部下半が欠失して全形が窺えないが，直線的な体部に，大きく外反する口縁部のつく形態である。底部は平底か丸底か不明であるが，出土土器片の中に丸底の一部と考えられるものがある。体部外面に縦方向の刷毛目の調整と体部内面は横方向の強いけずりが認められる。口縁部と口縁部から体部への接続部にかけては横ナデで調整されている。外面に煤の附着が認められる。胎土は赤褐色で，砂粒を多く含んでいる。出土個体数は少ない。

黒色土器　杯Aがほとんどで，鉢とおもわれる砂片が一片ある。

杯A（第4図3）　外にひらく輪状の高台のある底部に内弯気味にひらく口縁部のつく形態で，口縁端がわずかに外反する。土師器杯Aとは形態はほとんどかわらないが，口縁部の弯曲が強い。ロクロによる成形とみられ，底部外面にへらによる切り離し痕跡がある。器面内外はたんねんに横方向にヘラミガキを行っているが外面は内面に比べてヘラミガキがやや粗である。そして，器面の内側と外側上端部は炭素を吸着させて黒色を呈している。少数であるが器内外面とも黒色を呈するものがある。胎土は赤褐色で細

第4図　寺浦廃寺跡出土土器・石器



い砂粒を含んでいる。土師器の杯に比べて出土個体数は少ない。

須恵器　大甕の破片が数片あるだけである。

土師器・須恵器・黒色土器は，回廊基壇東側の雨落附近から一括して出土している。大宰府遺跡[注5]の出土品と類似点が多く，いずれも形式からみて，9世紀後半から10世紀にかけてのものである。

磁器　青磁と白磁がある。排土中から三点出土している。

青磁（第4図6・　　）　小さな輪状の削り出し高台に，内弯気味にひらく口縁部のつく椀型の形態で，口縁部は欠失している。釉は，淡い青緑色で，薄く均等に器面にかかっている。高台外端から底部外面にかけては釉はかからない。また釉面には細い貫入がはいる。内面に櫛状の原体による草花文が釉下に陰刻されているが破片のため全形がうかがえない。胎土は白色で，ざらつきがある。ほかに端部の肥厚する青磁片がある。釉は淡い緑色で，貫入がある。釉は厚く，胎土は白色でざらつきがある。

白磁（第4図5・　　）　高い削り出しの輪状の高台ある底部に内弯気味にひらく口縁部のつく形態で，口縁部がわずかに外反する。釉は濁った乳白色で，器面内側

と外面の上半部にかけて薄く均等にかけている。貫入は細いが内面と外面上端部にありその他の外面にははいらない。底部高台は，削り出しであるが，へらで粗くざっくりと削りばなしで，胎土がおきたままで調整をしていない。胎土は灰白色で，細い黒斑がある。1個体分出土している。青磁類はいずれも南宋系のものとみられる。

2. 瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦で，道具瓦は今回の調査では出土しなかった。軒丸・軒平瓦は各2種あって，組合せをもっている。平瓦についても整作技法からみると桶巻造りと一枚作りの2種がある。たたきにも斜向の目のあるものと，縄目のものとに二大別される。

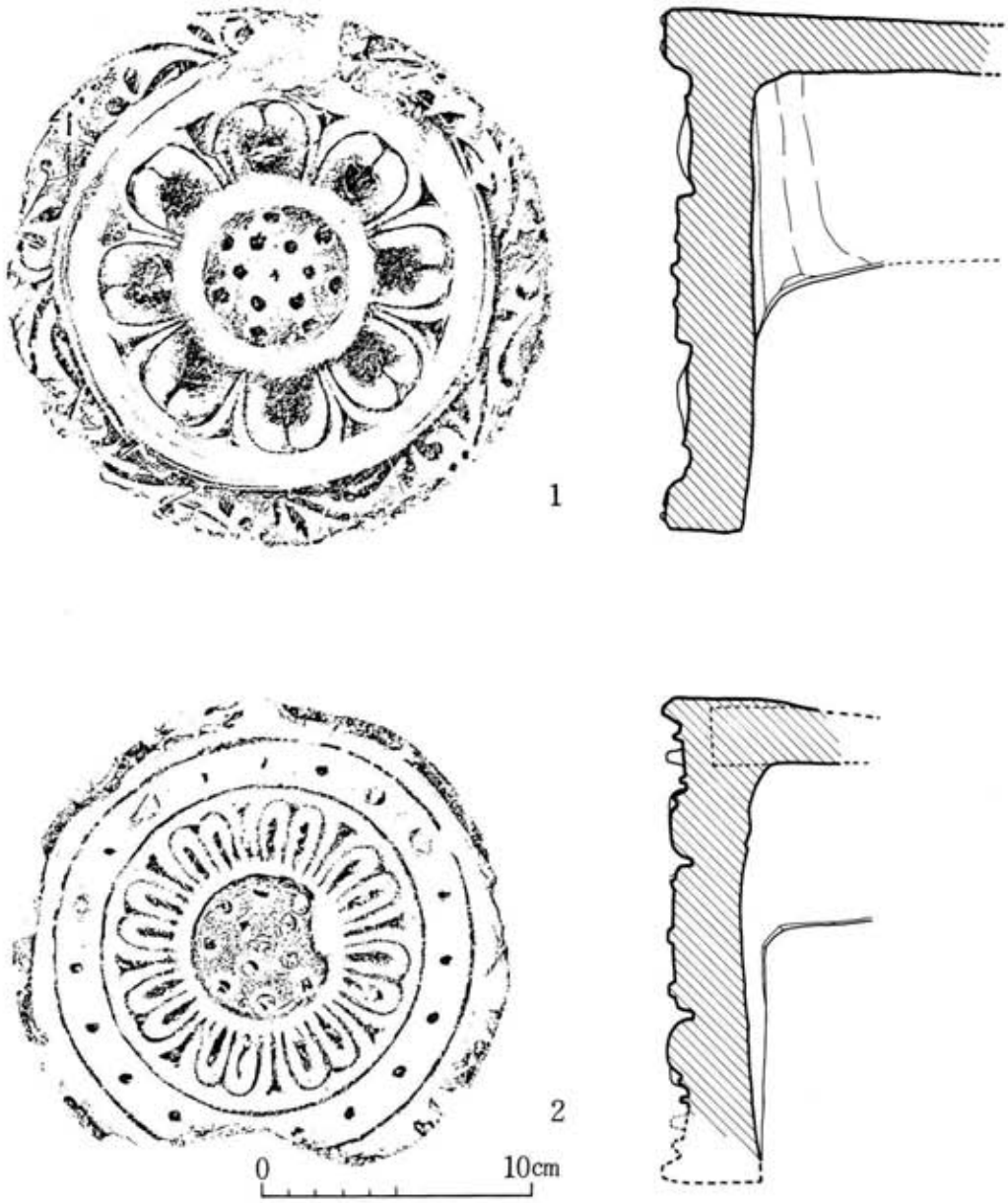
軒丸瓦　唐草文縁百済系単弁八弁蓮華文軒丸瓦と鴻臚館系複弁八弁蓮華文軒丸瓦とがある。これらはこの廃寺跡で従来から確認されていたものである。

唐草文縁百済系単弁八弁蓮華文瓦（第5図1・図版5－1）　瓦当面径19.3cm，厚さ3cmある。外区は高さ 1.0cm，幅 2.0cmの外縁に唐草文帯をめぐらし，内区は径 5.6cmの中房を中心にして外側に間弁のある，反りの強い単弁8弁蓮華文を配している。中房には1＋6＋7の蓮子を置いている。外縁が高く，中房・蓮弁はそれより低く，中房は蓮子の分だけが蓮弁より高く，全体として彫りが深い。丸瓦との接合は，縁部で，接合部は粘土を貼って，なでつけている。接合部両下端部はヘラケズリとナデで調整している。丸瓦部は両面とも布目があり，裏面の布目は表面に比べて細い。胎土は灰色または茶褐色を呈し，砂粒を多く含んでいる。

鴻臚館系複弁八弁蓮華文軒丸瓦（第5図2・図版5－2）　瓦当面径17.9cm，瓦当厚平均 2.8cmある。外区は，高さ 0.7cmの断面三角形の外縁があり，内縁に界線に囲こまれた強く突出する19の珠文帯を配している。内区は径 5.4cmの中房を中心にして，外側に間弁のある外りの強い複弁蓮華文を配している。中房には1＋4＋8の蓮子を置いている。各文様は外縁より一段低くなっているが，刻りの深い瓦当文様である。ただし蓮子の部分に型くずれが認められる。丸瓦との接合は縁部とそれよりやや内側の場合とがあり接合部は粘土を貼って，ヘラケズリ，ナデで調整している。胎土は灰褐色で，白色の砂粒を含んでいる。

軒平瓦　三重弧文軒平瓦と偏行唐草文軒平瓦とがある。これらの軒平瓦は従来から確認されていたものであるが，前者は瓦当面が完全なものが出土し，それも正面幅が45cmにも達する巨大なもので，現在知られている軒平瓦で最大のものである。偏行唐草文軒平瓦は，今回は少片しか出土しなかったが，従来出土したものと合せて復原を行ってみた。

三重弧文軒平瓦（第6図1・図版5－3）　瓦当幅45cm，瓦当厚 3.3cmある。瓦当面は櫛状の厚体で二条の深い刻線をえがき，突出部が三条の突帯文を構成している。突出部の先端は丸くなっており，ナデて表面を調整している。段顎で，この部分は2枚の粘



1．唐草文縁百済系単弁人弁軒丸瓦

瓦当―径19.3cm・厚 3cm，内区―中房径5.6cm・蓮子 1＋6＋7・外区―内縁幅1.1cm・外縁高 1.0cm・外縁幅 2.0cm・外縁唐草文，胎土―灰色ないし茶褐色・砂粒含，丸瓦部表面―両面とし布目。

2．鴻臚館系複弁八弁蓮華文軒丸瓦

瓦当―径17.9cm・厚 2.8cm，内区―中房径 5.4cm・蓮子 1＋4＋8，外区―内縁幅 1.5cm・珠文19・外縁幅 1.0cm・高0.7cm，胎土―灰褐色・砂粒含。

第5図　寺浦廃寺出土軒丸瓦

土板を合せて作っている。顎上面は瓦当面に平行する強い横方向のナデがある。瓦側面はヘラケズリで調整している。桶巻作りで，約 5.5cmの模骨の痕跡がある。平瓦上面は細い布目痕で下面は斜格子の叩目がある。胎土は茶褐色で，砂粒を多く含んでいる。

偏行唐草文軒平瓦（第6図2・図版5－4）　瓦当面復原幅35 cm，瓦当厚 4.9cmある。瓦当面は，内区に左方からの13回反転の偏行唐草文を，上外区に珠文，下外区及び両脇区に突鋸歯文を配している。唐草文は反転が強く，巻きこんだ形になっている。顎は段顎である。顎の下面先端部は粘土を貼って補強している。平瓦部の凹面顎付近は布目及び叩き目がみられず，ナデで表面を調整している。段の斜面の一部に布目があるが，ナデ調整につかう布の圧痕であろうか。胎土は暗灰色で，砂粒を含んでいる。

丸・平瓦（図版5－5～8）　平瓦は桶巻きと一枚作りとがある。凸面の叩きは斜行子が多いが，いくつかの形式があり，一枚作り，桶巻き作りとがある。縄目の叩きは斜行子の叩きのものに比べて数が少なくほとんどが一枚作りとみられる。紐作りのものは確認できていない。

瓦は形式をみると，唐草文百済系単弁八弁蓮文の軒丸瓦と三重弧文の軒平瓦とが，また鴻臚館系複弁八弁蓮華文の軒丸瓦と偏行唐草文の軒平瓦が組合うとみられる。今回の調査ではこの2種類組合せ以外出土していない。時代的には単弁と重弧文の組合せが，複弁・唐草文に先行するもので，前者は文様・製作技法などからみて，7世紀末から8世紀初頭にかけての所産で，後者は8世紀中頃以降の所産とみられる。

唐草文縁百済系単弁瓦については同類瓦とみられるものが，佐賀県佐賀郡大和町大願寺廃寺から出土し，百済系単弁瓦は佐賀県三養基郡基山町基肄城跡，同上峰村塔の塚廃寺，大分県法鏡寺，福岡県垂水廃寺など北部九州を中心に特殊分布をしている。このことについては小田富士雄の研究[注6]がある。

注1　松尾禎作「寺浦廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第6輯　昭和13年

注2　七田忠志「肥前晴気廃寺址と九州地方に於ける古瓦の一様式に就いて」考古学8巻4号 昭和12年

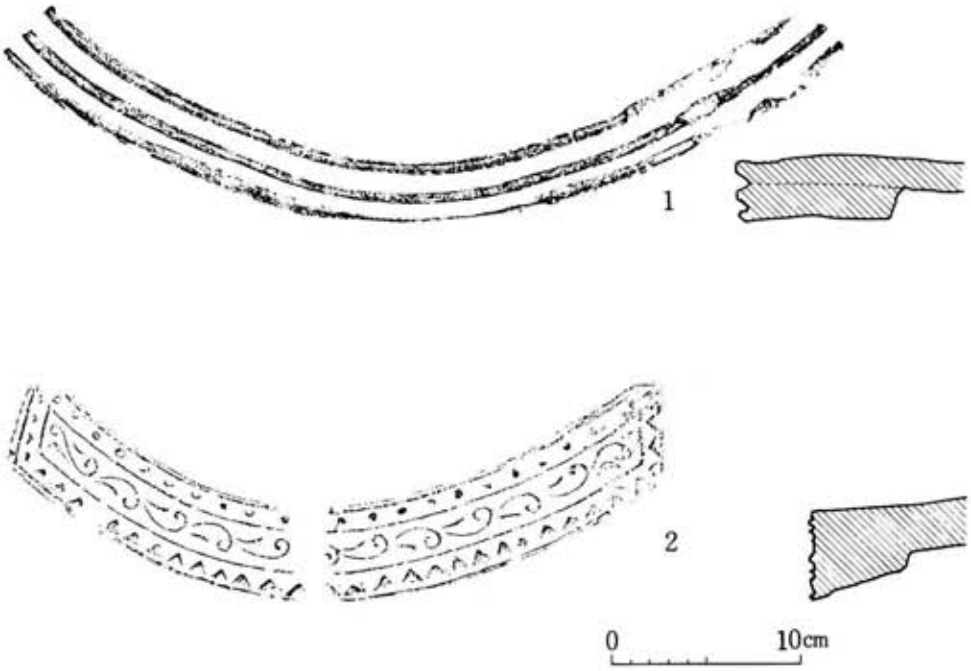
注3　木下巧「土生遺跡調査概報」佐賀県文化財調査報告書第25集　昭和48年

注4　高島忠平・樋渡敏暐「石木遺跡」佐賀県文化財調査報告書第35集　昭和51年

注5　「大宰府史跡」福岡県文化財調査報告書第47集　昭和46年

注6　小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考」史淵第95輯　昭和41年

同　　九州文化史研究所紀要第50輯 昭和50年



1．三重弧文軒平瓦

瓦当―幅45cm・厚 3.3cm，段顎，三条突帯文，平瓦部―樋巻作り・上面布目・下面斜格子叩目，胎土―茶褐色ないし灰色・砂粒含。

2．偏行唐草文軒平瓦

瓦当―幅35cm・厚 4.9cm，段顎，珠文―上外区22，鋸歯文―下外区27・脇区各4，平瓦部―表面平滑，胎土―暗灰色・砂粒含。

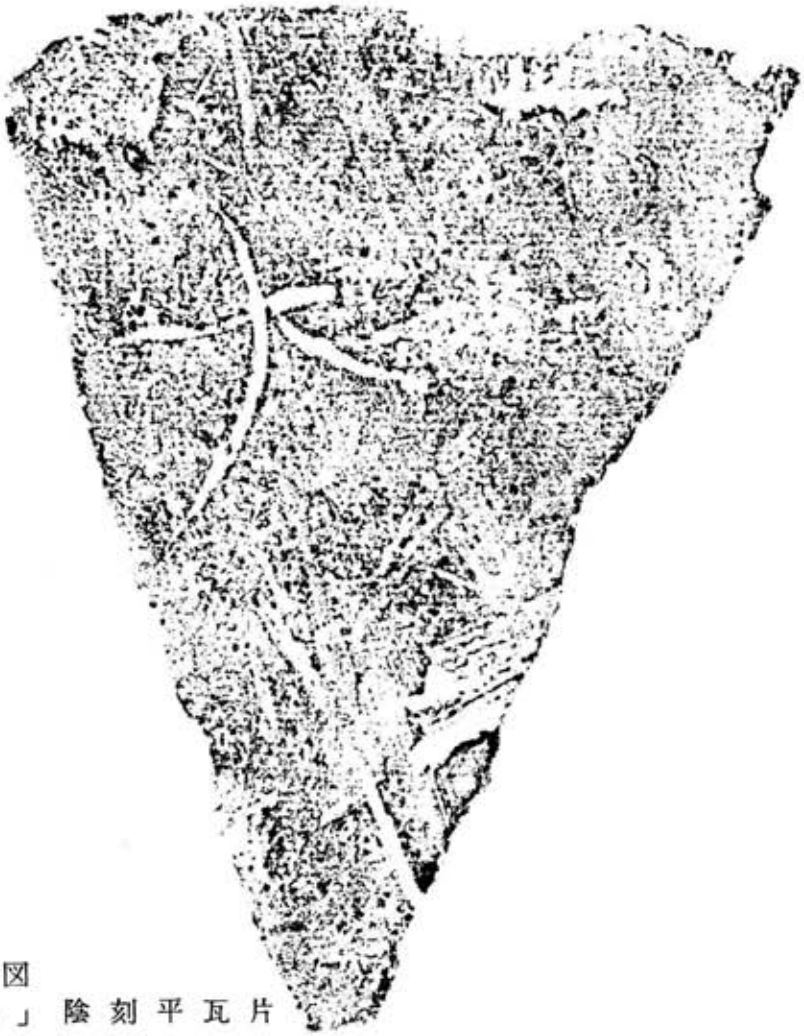
第6図　寺浦廃寺出土軒平瓦

Ⅳ まとめ

今回の発掘調査は，果樹試験場研修棟附属施設の建設に伴う事前調査であったため，発掘範囲が少規模で調査が不充分であったことはいなめない。ただ，今回の調査で回廊の基壇とみられる土壇を検出したことは過分の成果だったといえる。また，中門の基壇地業とみられるものを研修棟東北隅の工事で確認し，簡単な試掘で金堂跡の基壇地業の残存もあわせて確認できたことは予想以上に当廃寺跡の遺存度が良いということであり，将来の発掘調査に期待がもたれる。

そして工事中ではあるが，三重弧文軒平瓦の完形品の出土は，この種の瓦の全体をうかがえたとともに，大きさとしては日本で最大級の幅をもつ軒平瓦として，百済系単弁瓦とあわせて当廃寺跡の性格をさぐるうえで興味ある事実といえる。

（高島忠平）



第７図
「大」陰刻平瓦片

V　県下の考古資料

これから紹介する資料はこれまで県下の各地で発見され，個人及び県教委で所蔵されていたもののなかで重要と思われる未発表遺物である。これには七田忠志・柳川俊二・重松勝次の各氏から，協力を得ている。

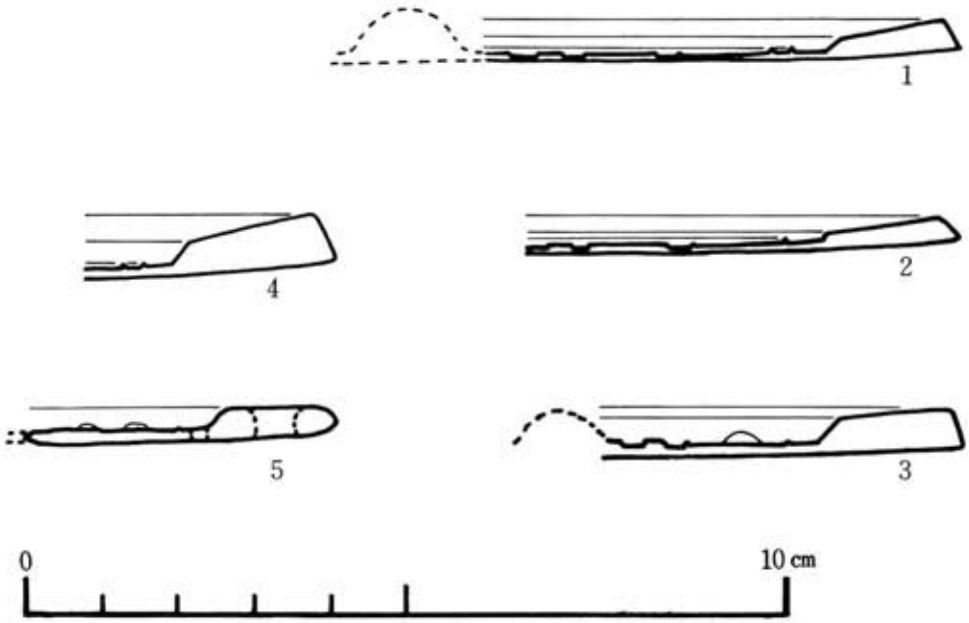
1．銅　　鏡

内行花文鏡（後漢）　後漢系の舶載の内行花文鏡は県下で4カ所の出土が知られている。出土状況のつかめるものではいずれも石棺ないし，土壙墓から発見されている。

内行花文鏡1（第8図1・図版7－1）　東脊振村大曲の長崎本線が切断した丘陸の南側の土取中に採取されたもので，崖面に二段に握りこまれた土壙墓の断面があり，その埋土中にも鏡片がわずか残存していた。鏡は復原面径14.6cmで，鈕は欠失している。全体の6分の1しか残存していない。鏡式の整った例である。外区は外縁が平縁で上面が内側向って傾斜している。その内側に斜行の櫛歯文帯があり，またその内側には界線に区切られたなかに有節重線文帯（松葉文帯）がある。

内区は四葉鈕座があり，そのまわりに斜行の櫛歯文帯，そして八弧の内行花文帯を配している。銘は不明であるが長宜子孫であろう。漆黒色を呈する。

内行花文鏡2（第8図2・図版7－3）　神埼郡東脊振村三津永田遺跡隣接する北方



1・2・4 内行花文鏡　3．四 蛇 鏡　5．方角規矩鏡

第8図　出土鏡実測図

の蜜柑畑で採集されたものである。鈕を欠失全体の4分の1しかないが，鏡式の整った例である。鏡は復原面径15.4cm，で，鏡式は1と同様である。銀色をしており遺存の程度が良い。

内行花文鏡3（第8図4・図版7－4）　神埼郡城原北外で，九州横断道分布調査の際採集された。鏡の復原面径は20 cmで，平縁の形式からみて，内行花文鏡とおもわれる。

方角規矩鏡（第8図5・図版7－2）　昭和32年2月17日，神埼町城原北外の組合式石棺の頭部右側で発見されたものである。鈕の欠失した鏡片で鏡の復原面径10cmあって内区にT・L・Vとその間に珠文・渦文が配されている外区は外縁が平縁を呈するが研磨のため文様は不明である。外縁と界線の間に斜行の櫛歯文帯がめぐっている。この鏡で注意すべきことは，鏡片を研磨して再加工し，外縁に2個直径4mmの孔を2個あけ，さらに2孔間の櫛歯文帯に直径 1.5mmの孔を1個あけている。ペンダントとして使用したものであろう。鏡背には副葬の際の朱の附着がみられる。また鏡面には緑錆があり，外周は漆黒色を，鏡面・鏡背は銀色を呈する。

四蛇鏡（第8図3・図版7－5）　神埼町志波屋三角の甕棺内からの出土である。全体の約5分の1の損欠で内区の文様体が明僚で，質は良い。復原径は11cmある。同様例は三津永田遺跡[注1]にある。　（高島忠平）

2．青銅器・鉄器

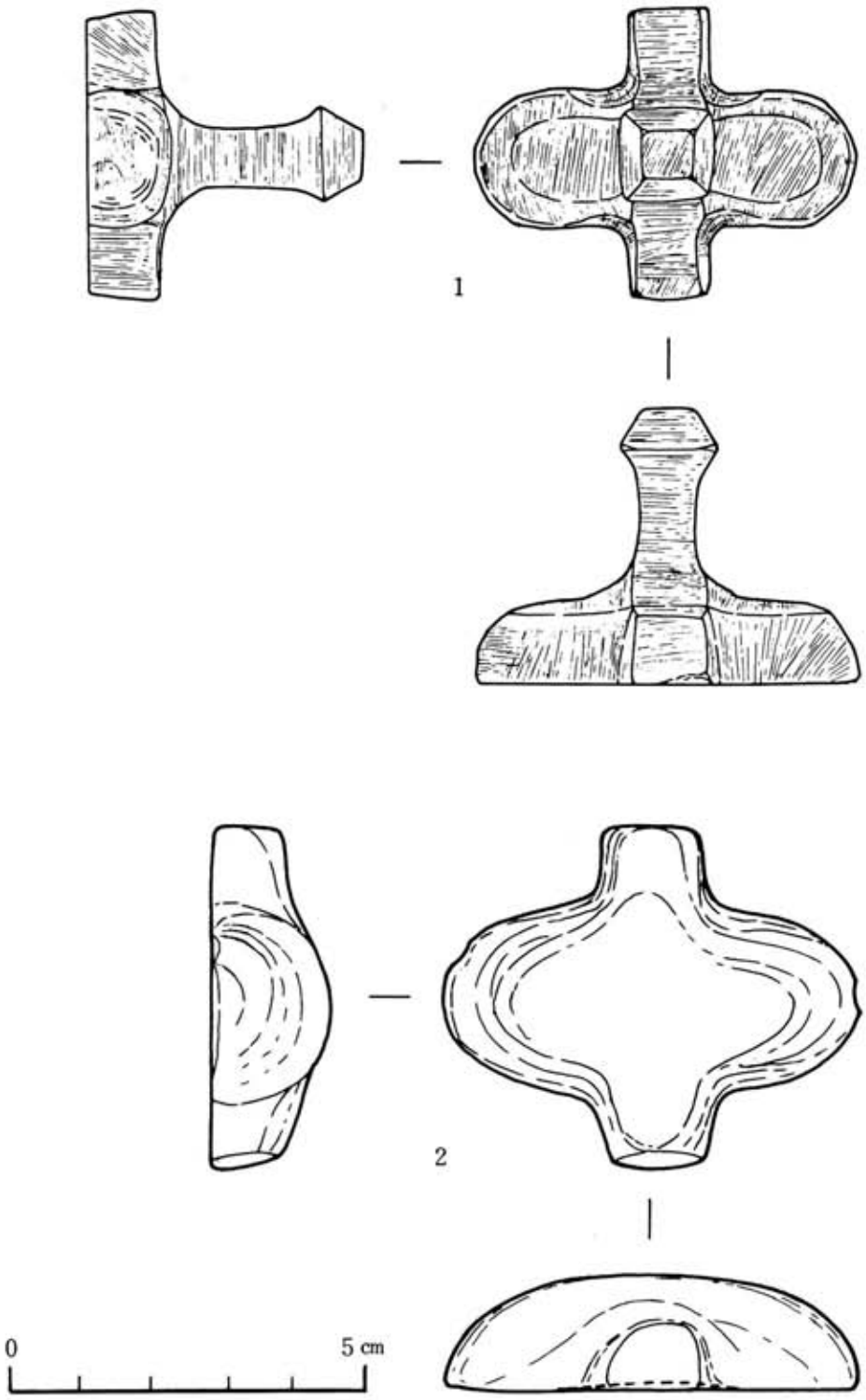
細型銅剣（第10図1）　神埼町神埼ケ里北方の宝剣さん(社)と通称されている石祠より発見され神埼町在住の郷土史家中園実氏によって注意されたもの[図2]である。現在長19.6cmで刃部先端部を欠損している。関部最大幅4cm，茎は幅 1.5cm，厚さ 1.3cmで断面楕円形をなしている。刃部はうちぐりをもうけ，研磨は刃に直角方向に行ない背に及び綾線をもつ。背の断面は八角形を呈し，厚さ 1.1～ 1.2mmである。表面は腐蝕して缺白した刃端をのぞいては比較的腐蝕しておらず，黒色に近い緑色を呈し，良く滑面を保っている。

本例は宝剣社の神体として奉納されていたものであろうが，この石祠の付近では弥生時代の遺物を見ることはない。しかし東方および東北方に位置する吉野ケ里丘陵には，甕棺墓などの弥生時代墳墓が豊富に包蔵されているところからこの銅剣は吉野ケ里丘陵遺跡の一画で発見されさらには神体として奉納されたものであろう。　（七田忠昭）

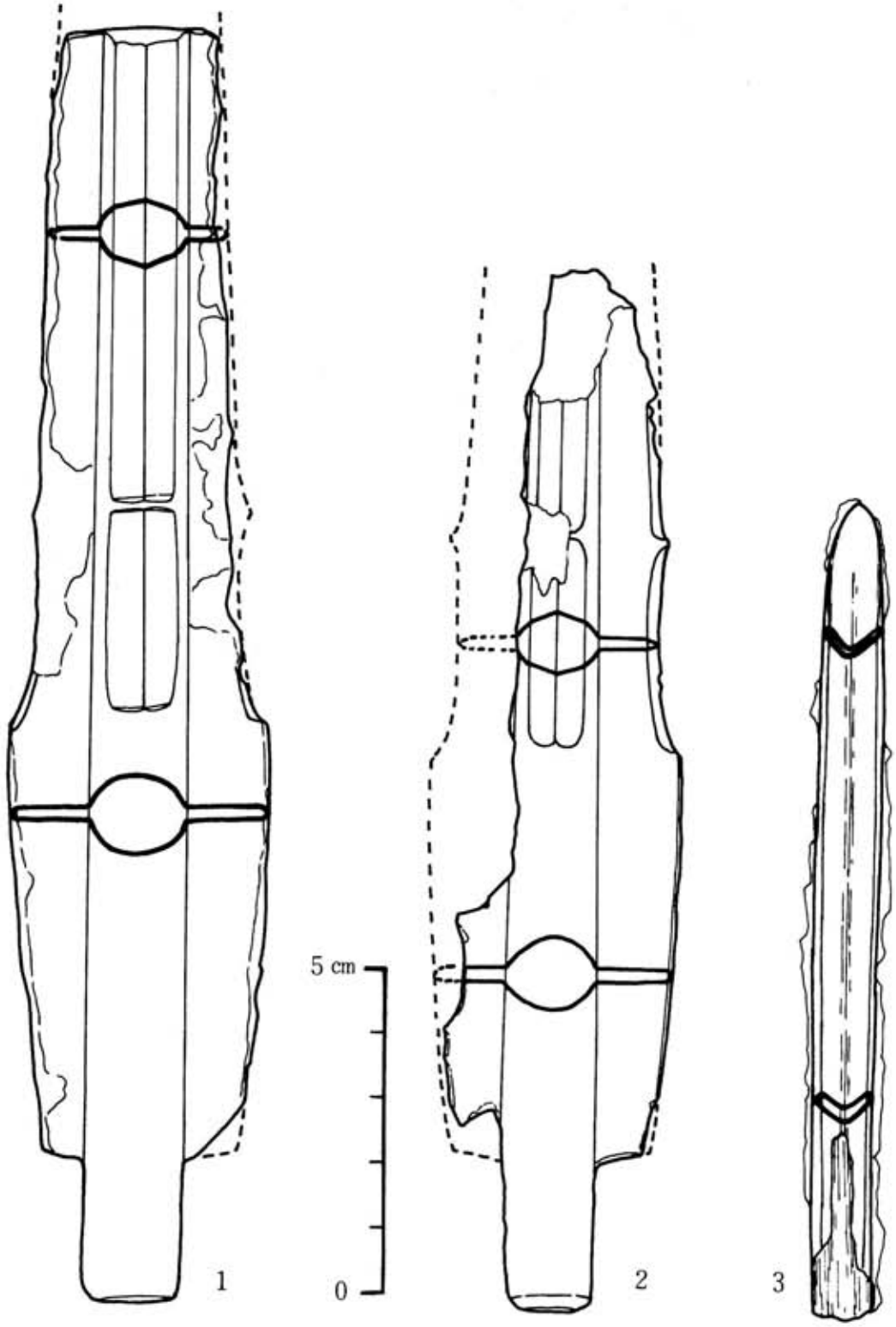
細型銅剣（第10図2）　三田川町吉野ケ里丘陵遺跡出土。

戦後間もなく発見されたものであり，どういう状況で発見されたかについては現在明らかでないが，おそらくは甕棺の副葬品と考えて間違いないと考えられる。

現在長16.1cmで，先端から刃部の約半分を欠損していて，刃部・関部の片側のほとんどを失ない腐蝕が進んではいるが，形態についてはほぼ推定できる。茎は幅 1.4～ 1.5cm，厚さ 1.3cmで断面楕円形を呈しており，関部の推定最大幅は4cmである。研磨は刃部に直角方向に施されており背におよんでおり稜線がつく。背の断面は八角形で厚さは約1cmである。この細型銅剣は先に示した神埼町宝剣社発見のものと形態さらには寸法規格までが極めて類似しており，同苑の可能性がある。

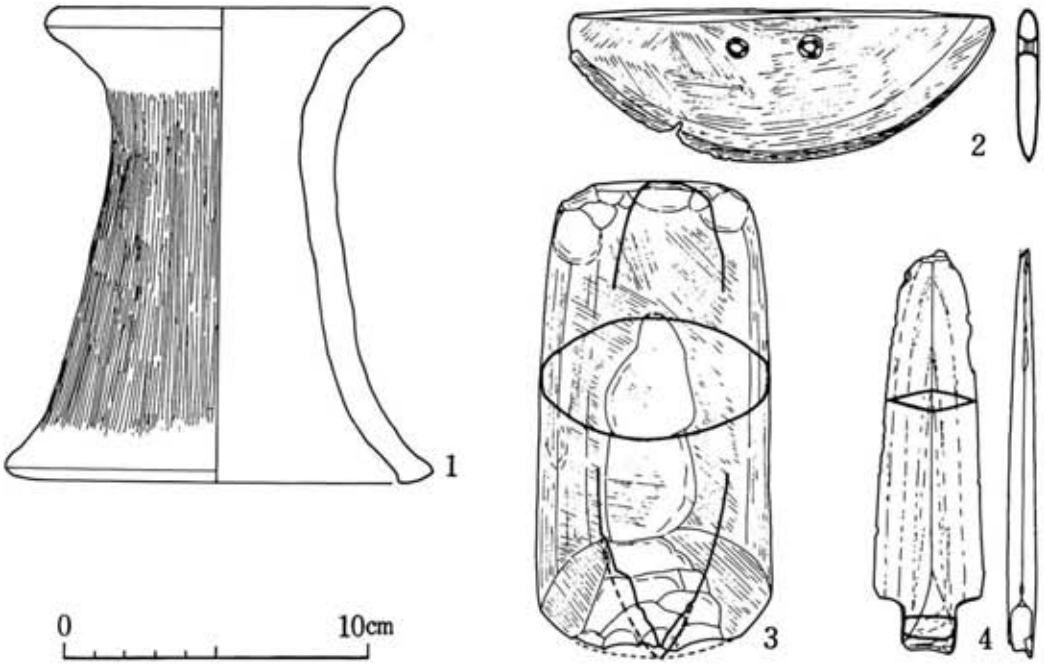


第9図　把頭飾実測図



第10図　吉野ケ里出土細型銅剣及び志波屋出土鉇

第11図　二本黒木・荒堅目出土器・石器



鉄　施（第10図３）　神埼町大字志波屋字上志波屋（三津永田遺跡北方１km地点）出土。昭和50年５月，土取作業中に一基の組合せ箱式石棺が露出し内部より顔面朱塗の人骨，内行花文明光鏡(図版7－6)とともに発見されたものである。現状では長さ12.6cm，幅１cm，厚さ２～３mmでほとんど完全な形態をとどめている。先端刃部は研いで刃をつけているが，柄部は研き出しておらず，刃部・柄部ともに反りを有しない。また刃部を除いて柄部の表面中央には稜線が認められ，両縁は角ばっているところから，細長い鉄板をＶ字状に折り曲げ，刃部を研ぎ出した鍛造品であると考えられる。なお柄部には木の残片が付着しており，おそらく先端２cm程を刃として用いたものらしい。

中期前葉と考えられるものが福岡県大宰府町吉ヶ浦遺跡[注3]，中期後葉のものが同県飯塚市立岩堀用遺跡10号甕棺[注4]より出土しており，さらには石蓋土拡墓，組合せ箱式石棺が盛行する時期には，副葬例が増える。

生活遺跡と埋葬遺跡とでは[注5]，特に鉄器の遺存状態の相違はあるだろうが，明らかに工具として用いられた鉄施が弥生時代の比較的早い時期から副葬品としてとりあつかわれているということは，弥生時代墓制における副葬のあり方，または工具のもつ意味を考える場合特に注意されなければならない問題である。本例は内行花文鏡を伴出した点，箱式石棺内出土という点においても，また南方１km所在の三津永田遺跡[注6]との関連において，弥生時代後期初頭のものと考えられる。　（七田忠昭）

３．石製品・土器

石製把頭飾１（第９図２・図版８－２）　神埼町荒堅目貝塚出土で第　図　の石剣とは一連して発見されたものである。いわゆる十字形把頭飾で，楕円形の石材の一面を平

坦にし，中央両側面に瘤状の小突起を造り出している。表面はよく研磨されているが，敲打による整形痕が残る。材質は褐鉄鉱で，灰黒色を呈している。横 5.9cm，縦 4.8cm，高さ1.65cmある。（柳川俊二）

把頭飾2（第9図1・図版8－1）　三田川町二本黒木遺跡で蜜柑を植付中に発見され三田川町田手の重松氏が保管していたものである。十字形の中央に隅入方笠飾を立てた形で，その笠飾りの頭部は平坦である。両側にある紐状突起は方柱状を呈している。表面はよく研磨されているが，その際の擦痕がみえる。材質は蛇紋岩で青黒色を呈する。蛇紋岩製のものでは朝鮮平城貞柏里発見[注7]のものであるがこれは銅製柄頭の芯として使用されている。横 5.4cm，縦 4.1cm，高さ 3.9cm である。石製把頭飾は先述の荒堅目例をあわせて県下で2例であるが，長崎県里田原[注8]，福岡県甘木[注9]，奈良県石上神宮例を加えて，これで日本では5例ということになる。（志佐輝彦）

石庖丁（第11図2）　二木黒木遺跡で蜜柑園開墾時に発見された。遺構は不明であるが，カメ棺など多数出土したとのことである。

完形品で長さ14cm，最大幅5cm，厚さ1cmある。外彎刃半月型態の石庖丁である。刃は両面から研磨した両刃式で，背部近くに2個の紐孔が，敲打せずして両面から穿孔している。材質は輝緑凝灰岩製で，立岩遺跡[注10]製と推定される。

太型蛤刃石斧（第11図3）　二木黒木遺跡で発見されたもので，現在長さ15.4cm，幅7.6cm，厚さ4cmを計る玄武岩製の石斧である。背部は調整のための剝離があり，両側面も同様な製作過程が見える。最後に研磨を行っている。刃部は両刃であるが欠損している。

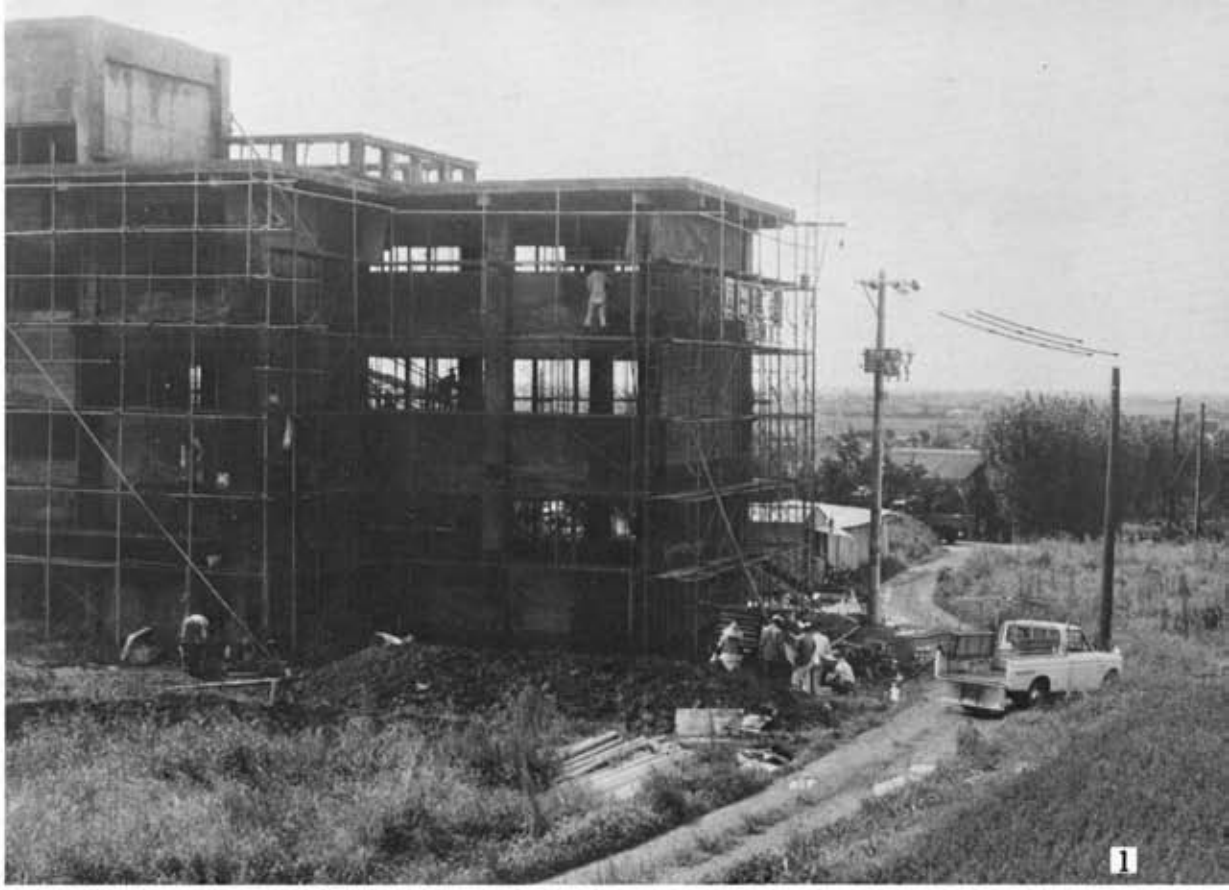
磨製石剣（第11図4）　神埼町荒堅目貝塚出土で，前記把頭飾とは一連して発見されたものである。鉄剣形石剣で断面菱形をなしている。ほぼ完形で長さ13.3cm，最大幅3.6cm，最大厚さ 1.0cmある。石材は頁岩を用い，石材の目を考えて製作している。茎の端部は剝離痕が認られ，関の部分は刃に対してほぼ直角に研き出し，刃部は両面からたんねんに研磨している。

器　台（第11図1）　二木黒木遺跡で発見されたもので，高さ15.2cm，上端径11.9cm，胴部径 8.2cm，下端径14.2cm，あって鼓形をなす。内面にシボリ目がみられる。

調整は上端部・下端部の内外面をヨコナデし胴部表面には縦方向の刷毛，内面は縦方方向のナデツケをしている。焼成は良く，黄褐色を呈し砂粒を多量に含んでいる。

注1　中園実「野の石祠に祀られていた銅剣」神埼の歴史と文化8号　昭和51年
注2　金関恕・坪井清足「三津永田遺跡」日本農耕文化の生成
注3　橋口達也「初期鉄製品をめぐる二・三の問題――福岡県吉ケ浦遺跡出土の鉄器を中心にして」　考古学雑誌第60巻第1号　昭和49年
注4　児島隆人「立岩」学生社　昭和44年
注5　児島隆人・藤田等「小瀬隈土拡墓遺跡」嘉穂地方史　昭和48年
注6　金関恕他前掲書
注7　藤田亮策・梅原末治「朝鮮古文化綜鑑」第1巻　昭和19年
注8　長崎県教育委員会「里田原遺跡(図録)」長崎県文化財調査報告書第14集　昭和47年
注9　柳田康雄教示
注10　中山平次郎「飯塚市立岩焼の正の庖丁製造所址」福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第9輯　昭和9年

図版1



1.発掘地点全景　2.塔心礎

図版2

1.発掘状況　2.回廊基壇（東から）

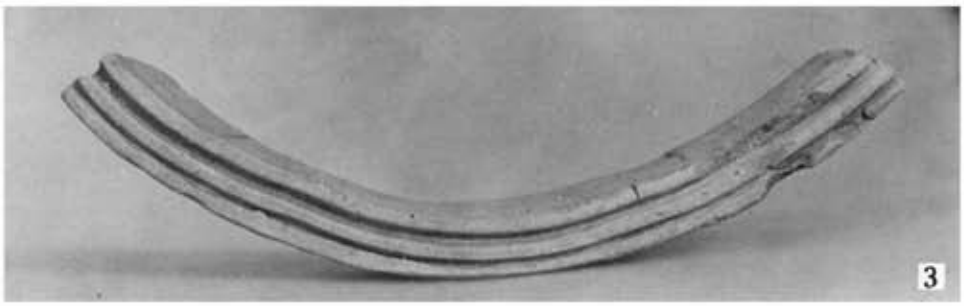
図版3

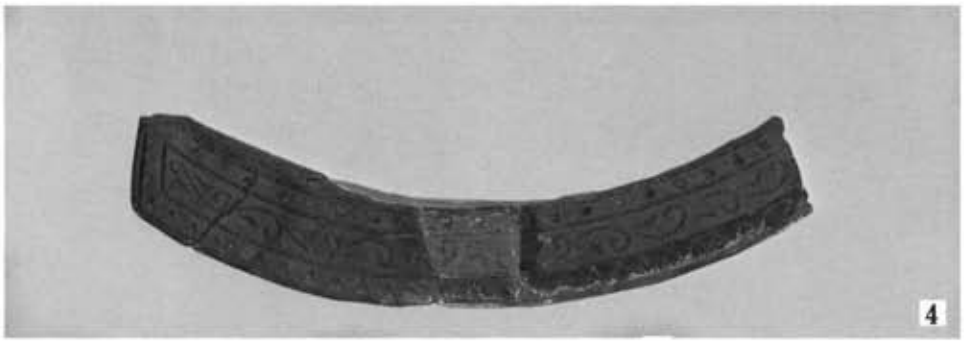
1.発掘区北壁土層　2.発掘区南壁土層

図版4

1.複弁軒丸瓦出土状況　2.単弁軒丸瓦出土状況

図版5

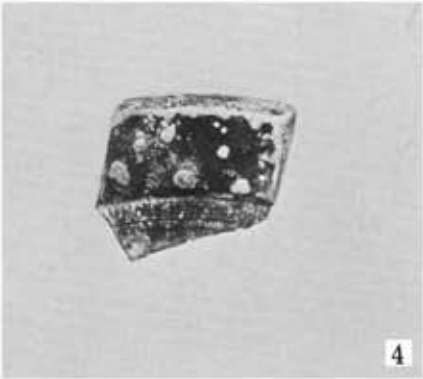


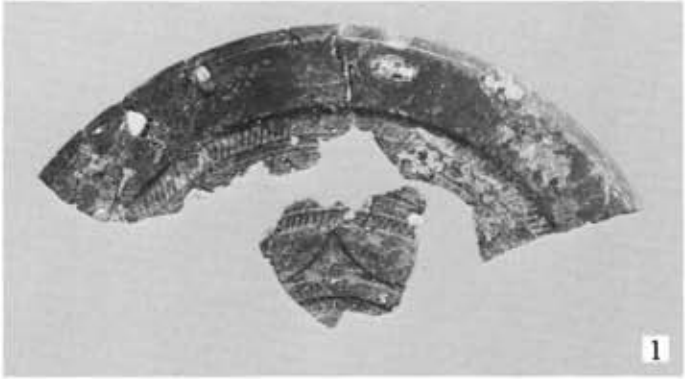


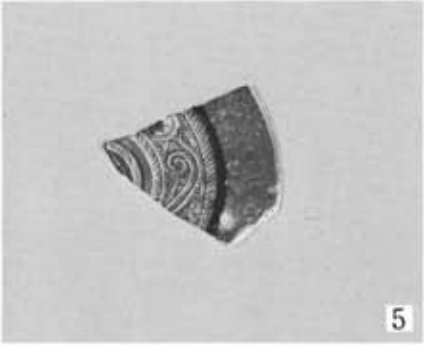
図版6

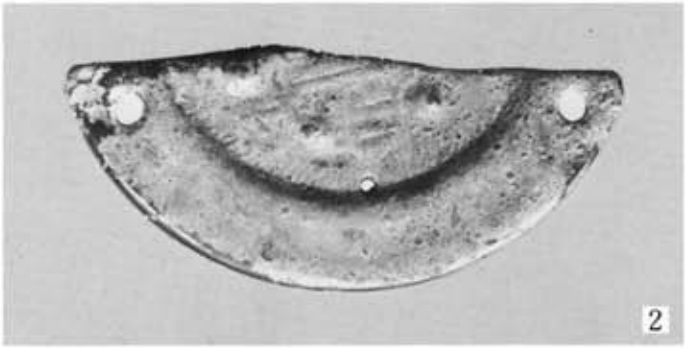
1・2土師器　3.「大」刻瓦片　4.丸　瓦（既出土）　5.鬼　瓦（既出土）

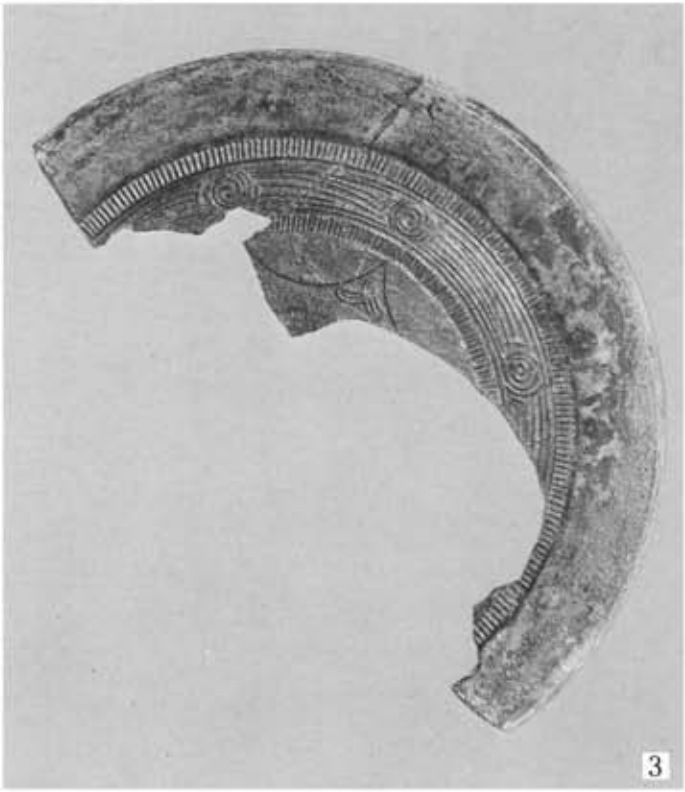
図版7











図版8

1.二本黒木　2.荒竪目

例　言

1．本報告書は昭和49年度に実施した緊急発掘調査と新発見考古資料の報告書である。

2．本報告書の作製は県教育委員会文化課文化財調査係で行った。編集は高島忠平，執筆は高島・仏坂勝男・柳川俊二・志佐輝彦・立石泰久・七田忠志が分担した。

佐賀県文化財調査報告書第34集
寺浦廃寺発掘調査報告書
（付 県下の考古資料）
昭和50年3月
発　行　佐賀県教育委員会
印　刷　佐賀県印刷局